

聖フランシス托鉢教團の時代的意義

柴垣英子

序

約一千年にわたる西洋中世はキリスト教文化の時代であり、すべての文化事象および公私の生活現象がキリスト教のいぶきの下に動いた時代であつた。教権制度(Hierarchy)は實にローマ教會をピラミッドの頂點とする一大社會的組織となつて、世俗の封建社會構造と相應じ、かつこれと深くからみ合つて發達しつゝ、かゝる時代を擔つてきたのであるが、これと並びこれに含まれつゝ、中世キリスト教社會の力強い支柱となつていたのは修道院であつた。修道院は、社會的政治的組織となつて現實社會に發展をとげた教會に對し、禁欲的戒律によつて俗世間をはなれた敬虔な純粹に宗教的な生活をなすことを理想とするものである。長い中世を通じキリスト教は教會および修道院によつて保持

され性格づけられてきたが、更に考えると、究極の理想は變らぬとしても、教會も修道院も中世社會の進行と共に、その現實社會への對應の仕方がかわり、働きかけ方がかわつてゆくのは當然であらうし、また人々の宗教心が社會的歴史的環境からどのように影響されつゝ現れるかということとも興味ある問題であらう。かゝる見地から、中世末期十三世紀に中部イタリアにおこり、修道院運動の系列の上に獨自の一新局面をひらいた聖フランシスの托鉢教團運動を取上げて考えてみたい。この僧團も創始者フランシスの死後ますます大きな組織となつて、彼の意圖しなかつた發展をとげて行つたのであるが、ここではフランシスの人格を中心として集つた初期の兄弟團の性格とその時代的意義とを考察しようとおもう。

一

フランスの生涯については P. Sabatier や J. Jorgensen 等々の日本譯もあり、(P. Sabatier, *Vie de St. Francois d'Assisi*, 1894; J. Jorgensen, *Der hl. Franz von Assisi*) よく人に知られてゐるところであるが、彼は一一八二年中部イタリアの一都市アシジに生れ、父は富裕な織物商人であり、母は貴族の出であつた。この富裕な商人の息子は若い頃から遊蕩仲間の中心人物となつて虚榮と奢侈にふけり、また當時イタリアにも遍歴してきていたプロヴァンスの吟遊詩人のうたう英雄の物語や、騎士のロマンスなどに青春の感情を養われ、華美にして多感な青年時代を享樂していたが、二十歳をすぎる頃熱病にかゝり、その病床にあつてこれ迄の生活を回顧し、地上の欲望の凡てがはかなく無價値なことを悟つたといわれている。その後暫くして突然一切の所有を捨て、神への奉仕を思い立ち、父の勘當をも意に介せず、ひたすら厳しい禁欲的生活へ入つて行つた。孤獨にひたり、祈り、神の愛を説き、寺院の修築、貧者へのほどこし、病人の看護等に専心する彼の周圍には、共感し信服し生活を共にするものの數が次第に増えやがて一二〇九年彼等は法皇に願つて、一切無所有の清貧

に生き、福音を民衆に説くことを使命とする一教團たる公認を得た。

彼等は互いに信仰と友愛とによつて交わり、フランスは慈父の如く兄弟達をいたわり戒しめつゝ、キリストの地上における生活にひたすら倣つて、その使命達成に向つた。その熱誠と共に兄弟等の數もいよく増し、一二一五年の頃には、貧しい粗布の衣に繩の帶をしめ、人々に交つて福音を説き、また勞働する彼等の姿は北部中部イタリア、南佛その他の地方にも普く見られ、やがてドイツ、フランス、スペイン、ハンガリー、オランダ等各地への外國傳道が組織的に計畫され、フランス自身異教徒教化を思立つてシリヤにわたる等多くの努力がなされた。彼等は無所有をまもり、自らの勞働の報酬や物乞いによつて日々の生活の資を得つゝ、遍歴の旅をつゞけ、福音の傳道者として神と人に仕えたのであつた。一二一九年の全體僧會に集まつた兄弟の數だけでも五千人あつたと記録されている。

兄弟達は謙遜の心から自らを「小さき兄弟團」(*Ordo fratrum minorum*; *Order of the minor Brothers*)と稱していたが、物乞い即ち托鉢を特徴とした故に、後に此の僧團は「托鉢教團」又は「乞食教團」(*Ordines mendicantes*; *mendicant Order*)として知られるようになつ

た。

なお一二二二年にはアシジの貴族の娘クララの宗教的献身によつて女子の「姉妹團」(Ordo sororum, Order of the Sisters)が設立された。先の兄弟團は第一團、これは第二團になる。更に一二二一年には、一般の社會生活を営みつゝも、志を立てゝ出来る限り同じ宗教的生活を送らうとする市民の團體たる第三團の成立がみられる。

十二世紀の終りから十三世紀にかけてイタリアの發達せる一都市に人となつたフランスの人柄および思想、更に彼の教團の性格の中には、明らかにその歴史的社會的背景に應じた個性を認めることができよう。當時はまさしく自治都市の勃興期であり、商工業の發達に伴う市民勢力の伸張、それとともに自由精神の振興、人間的感情の開花等、やがてルネサンスを現出するはずの新傾向が、都市の經濟的繁榮を基礎としておこりつゝあつた。皇帝や法王の從來の支配權力に對する市民の反抗、都市内における皇帝黨と教皇黨との對立、諸都市間の利害鬭争、都市の城壁外に住む貴族と都市々民との軋轢等々、いずれも中世封建社會の限界を打破せんとする新しい時代の動きを物語るものであつた。

一一八二年フランスの誕生を迎えたアシジ市もこのよ

うな時代の雰圍氣において例外的存在ではなかつた。一一八九年には、イタリアに支配權を争つていた皇帝と教皇との確執の間から實力によつて獨立を獲得し、更に都市の外に住む貴族達をも壓服せしめんとして争ひ、貴族側がペルージャ市に救援を求めたため、同市との間に二ヶ年にわたる戦争が行われた。この戦争に若きフランスも從軍し、アシジの敗北によつてペルージャに捕虜生活を體驗したのであつた。戦後アシジ市は經濟的繁榮を遂げ、既成の封建的束縛からの自由獨立を求める市民の勢力はいよゝ／＼伸長した。一二〇三年一異端者が市長として選舉され、ローマからの警告があつたにもかゝらず、市民は彼を支持し、遂に一年間の任期を全うせしめたというのもそのあらわれであろう。他の諸都市にも同様の傾向が現れていた。まさに十三世紀は社會の進展につれて新しきものが舊きものとつて代らうとする時代であり、經濟、政治、また文化の面に新機運が躍動しはじめていた。これはいちはやくイタリア諸都市に起つた動きであつたが、やがてヨーロッパ各地に普遍化したのである。

ところで宗教界にはどのような動きがみられるであろうか。十三世紀は教皇權および教會權力の絶頂期であつたと同時に、そのてん落の危機を孕める時代でもあつた。教皇

と皇帝即ち教權と俗權との争いは愈々激化し、教會や修道院内の俗化頽廢の風潮は益々目立つてきた。さらに勃興する都市に人口が増加しつつあり、社會機構の重心が封建領主の手から都市に移りつゝあつた當時にあつて、封建機構に相應じた形態をもつて中世を支えてきた教會および修道院の組織、また教區制度には當然無理も生じ、再編成の必要に迫られた。そのことに伴つて宗教界における諸々の掟が亂れ、僧侶の俗化頽廢を生じたことも否めない。イタリアの地中海貿易その他の商業貿易による富は、司教や修道院長等特權的高級僧侶の手もとにもどん／＼流れ込んできたし、僧職賣買はひん繁に行われていた。宗教的理想に對する背馳は到る處で數えるいとまのないほどで、それに對する一般民衆の不満や反感、僧侶に對する不信はこれを收拾しえざるほど昂められつゝあつた。しかしながら一方社會の變動期にあつて不安におののく人心の宗教的要求はひろく強く醸成されていた。そんなわけで十二世紀始め頃より俗人説教師が現われ、民衆に福音を説き、同時に教會や修道院の俗化頽廢を非難しつつ、教皇の命による十字軍説教師とまじつて各地を巡り歩いたが、それらの聲は民衆に訴える處が多かつた。かゝる状態の内より反教會的氣分が育てられて行つた。

教會と修道院によつて充たされなかつた一般民衆の不満に相應じて、異端的運動の激化と托鉢教團の發足がみられる。十一世紀以來西部中部ヨーロッパの都市を中心として勢力を扶殖してきた異端諸派は南佛と北伊で特に猖獗をきわめ、十二・三世紀にはこの運動が教會の基礎をゆるがすほど蔓延するものも、當時の教會や修道院の宗教的墮落に對する反感や、それらがもはや民衆の宗教的要求を充たし得ないことに對する不満が、一般に深く浸透していたからであり、さらに、それは新しい社會狀勢の進展とともに都市に集聚して地歩を得んとしていた下層の農民や手工業職人、および下級僧侶等の、富裕な封建的特權身分として支配權を握つていた高級僧侶達の階級に對する社會的反抗たる性格を帶びていたからであつた。¹托鉢教團の運動もかゝるときにあらわれたが、これは純粹な修道院的理想を奉じて民衆に感化を與え、宗教の眞義を回復して、危機に直面した教會の良き支柱となつたのである。四つの托鉢教團の中最初のも有名なものはフランス教團であり、少しおくてカルメリット、アウグスティンの教團が設立されたが、夫々に獨自の性格を持ち、獨立のものとして考察され得る。

二

ところでフランススの托鉢教團はいかなる性格をもつていたか。まづ第一に無所有の理想があげられるであろう。この理想はフランススの精神の中核をなすものであり、この點に從來の修道院における清貧の理想の一層の徹底がみられる。

一二〇九年、フランススがローマを訪れ、法皇インノセント三世より許可を得た。この教團の掟の第一條は、「從順に、純潔に、しかして財産を所有することなく生活すること……」であつた。この三つの理想は、かのベネディクトが、六世紀半ばにベネディクト修道院の掟として定めて以來、西歐修道院の信條として掲げられ保持されてきたものであるが、時代の下るに従い、この掟がいかに亂れ、いかに俗化の傾向が辿られて行つたかは多くの資料の示す所である。十世紀初期のクリュニーの改革やそれ以後行われた諸改革もこの傾向をよく救うことはできなかつた。從來の修道院の富裕化俗化の一原因は、團體的所有の是認であつた。ベネディクトが教えたところによれば、修道院に入る者は個人としては財産の所有を禁じられるが、修道院全體としての財産の所有は許される。凡ては院の支配下におか

れ、個人はこれに一指もふれることができないといふのであつた。團體の所有は認められ、堅固な修道院建築物、勞働の尊重から生れ貯えられる財物、信徒や新參者からの寄進等は當然のこととして受入れられ、やがてそれらが増大するとともに、修道僧の所有欲をそゝり、掟は亂れはじめたのである。「隠された貯藏品を採すために院長は時折修道僧達のふとんの中迄さぐらねばならない」ことも起つたし、「院の財産が修道僧の私用に供され、彼等の友人や親類の者を養うために着服され、不埒な金の受領が行われてい⁴る」という状態もみえたのである。更に封建制度の進展とともに、修道院も多く土地や農奴を所有し、封建社會における經濟的政治的一單位となり、教皇から免税の特権を與えられてますます現世的勢力を挾殖し、修道院長が封建領主の地位に昇るものも多く出た。本來清貧に生きる信仰的生活を目指した修道院の、十二三世紀における土地、農奴その他の財産の膨大な所有、その現世的勢力の増大には驚くべきものがある。けだし封建社會の中にあつて獨立の共同體として存續して行くためには、少くとも封建的所有形態をとらざるをえなかつたし、又現世を離れて共同生活を營む僧達にとつてその生存の維持のためにも何らかの所有は必要であつたのである。またかゝる堅固な生活の基礎

を持つていたればこそ修道院は多くの社會的文化的役割を果しえたといふことも見逃すことはできないのである。しかし必要以上の所有の増加は掟の抛棄であり、俗化であることはいうまでもない。かく富裕になり特權身分となつた修道院は俗的欲望や現世的野心に動かされた人々をも招くようになり、もはやそれは一般民衆の導き手、またその信仰のよりどころではありえなかつたのである。

修道僧の物質的所有欲は貨幣經濟の進行とともに激しくなり、金錢や財物と引きかえに新參者が收容され、當時盛に行われていた僧職賣買は修道院にも及んだ。頻繁におこる訴訟事件も修道僧の所有争いからおこるものが多く、その法廷で贈賄收賄が物をいうことが多かつたといわれる。院内で宗教的勤行につとむべき僧が、自由に社會にでて商取引に従事する傾向も盛んになり、その商業活動はかなり著しかつた。そしてその貯蓄された金を以て土地を買い、更に金貸しを營む者さえあつたが、その反面彼等の借金が院の財政を脅かすことも多かつた。

かゝる物質的所有による宗教界の頹廢に對して、内部からの改革運動のみならず、外部からの批判や非難、反感がおこつて、それが異端運動の激化を助けたことは既に述べたが、同じくかゝる宗教界の現状に對立せる無所有の清貧

生活を理想としながら、教會への反抗でなく、忠實な服従のうちに志を實現せんとしたのがフランスス托鉢教團の人であつた。

從來の修道院が團體的所有を認めたことに對して、フランススが團體的にも個人的にも完全な無所有を志した點にその獨自の意義が認められる。先に述べた掟の第一條につづけて、「兄弟達は凡て我等が主イエス・キリストの謙遜と清貧とに従うべし。而して使徒が『衣食だにあらば我等はそれにて満足なり』と言えるが如く、それを除く全世界の何物をも所持すべきに非ざることを忘れざるべし……」とあり、兄弟達は一枚の粗布の衣と一枚の下着と繩の帶の外何物をも持つべきでなく、必要な場合には履物が許された。住むべき一定の住家を持つことも禁じられた兄弟達は、二人づゝ組んで巡歷の旅をつづけ、何處にあつても常に旅人又は巡禮者の如く生活した。多數の兄弟達が一定の住家に集めることは貧しさを守り難くする故に、フランススはこれを避けたのである。アシジの市民達が相談し、年々増加する兄弟達の集會の場所として、彼に無斷で一軒の家を建てはじめたときも、フランススは兄弟達に命じて屋根からどん／＼取り壊させた。たゞこれはアシジ市に屬するものであると押止められて、ようやく破壊を思い止まつたような

こともあつた。一二二一年に書かれた掟には更に「働く途を知る兄弟達はそれが彼等の魂に反することなく又誠實にそれを爲し得るならば、働きて彼等が知れる業を爲すべし……その労働の報酬に金銭以外の凡ての必要品を受くるはよし。而して必要ならば……施物を乞いに行くもよし。」とある。神の下僕として隣人愛に生きる兄弟達は、自らのつましい労働を以て或は病人、癩患の看護に、畑仕事や家事の手傳いに奉仕した。フランスはかく労働を尊重したけれども、それはベネディクトの掟におけるごとく修道院に屬した一劃内に主に農業労働に従事し、その成果を貯えるという形式の労働ではなく、社會の中で隣人に奉仕する形式をとり、報酬があれば金銭以外は生活の資として受けとり、それが足りなければ各戸に物乞いをして食物の残り等を得てその日の生命をつないだのである。労働の報酬に金銭を受取ることは固く禁ぜられたが、フランスは凡ての現世の物質の中で金銭を最も憎んだかの如くである。當時貨幣經濟が進行しつつあつたけれども、貨幣は未だ日常必需品の賣買の際の手段であるより寧ろ過剰のあらはれとして奢侈品の賣買や、その他増大する所有欲の満足のために必要であつた。労働の賃銀も一般には生活必要物資を以て支拂われていた時代である。かように金銭が必要以上の

所有欲を代表していたことが、フランスをしてあれほど金銭を憎惡せしめた原因であつたのだろう。

かかる徹底せる無所有がこの教團の理想であり、それはキリストの地上における生活に倣うことであつた。無所有又は貧しさに對してフランスが如何に激しい情熱を抱いていたかは、彼が親しく呼んでいた「ドンナ・ポエルター」(Lady-Poverty)なる語によく示されている。當時の騎士階級において貴婦人への憧憬が一つの高貴な心情とされていたが、その如くに彼は「貴婦人たる清貧」を愛し尊んだのである。こゝに騎士的精神のフランスへの感化が認められ、それは他の面でも彼の思想を形成する點としての要素となつていると考えられる。また「ドンナ・ポエルター」この言葉そのものに、フランスが「無所有」を人格的生命的感覺を以て愛したことが表現せられている。

三

第二に人格的感情の發展、愛の強調があげられる。フランスは、キリストが此の世で生きた完全な無所有と愛と謙遜との生活に倣い、キリストが此の世で嘗めた苦惱を自らも選び取ることこそ、神の下僕にふさわしき生活であると考えてひたすら精進したが、彼がキリストへの愛とその

生活の模倣とを實際にいか具現して行つたかは、彼をめぐる逸話や記録を繙く者の感動なしには讀み得ない所である。キリストの人格そのものが彼にとつて愛と崇拜の對象となり、模範となつていた。兄弟達も一人一人がキリストの人格に倣うべく要求されたのである。

中世においてキリストの人格に對する愛およびそれとの一致が明らかに表現されたのは、とくにクレールヴォー修道院のベルナルド(1091~1153)によつてであるが、十二世紀にはキリストの人格への愛と崇拜が次第に人心に深く浸透して行つたのである。キリストの人格を愛しキリストに倣うことを理想とする思想は、フランス出現以前の中世修道院生活の中にも現われていたとはいへ、それは多くの人間を此の世から引離して己れの魂とキリストの人格との觀照に終らせた。これに對しフランスはキリストの生活に自ら倣つて現實社會における隣人への愛と奉仕、貧しさと言の生活を実踐することによつて、この思想を生活原理として社會に教えたのである。異端諸派の運動も同じくキリストの無所有の生活を重んじてこれに倣わんとしているが、しかし彼等がキリストの人格より以上に無所有の理想そのものを重んじる傾向があつたのに對し、フランスにとつては、キリストの人格的完全が愛と崇拜の究極の

對象であり、「無所有」はこの象徵なのであつた。このキリストへの愛と崇拜およびその模倣の中に人格的な感情の現われを見出しうる。けだし人は人格的自己意識においてこそ、他の人格としてのキリストを感じうるものだからである。

フランス團の兄弟達の結合の仕方および服従に關する考え方にもそれは認められる。ベネディクトの掟においては修道院長の最高支配權が規定され、その下にある修道僧達の絶對服従が要求されたが、フランス團にあつてはその長と兄弟達とは命令者と服従者との關係でなく、上下のない愛の關係で結合し、兄弟相互も同様に凡てが信仰による友愛を以て相交はり相仕え合うことを志した。このことは掟の中に「兄弟等の中何人もその中において特に權力或は權勢を有すべからず……魂よりの愛を以て互いに進んで仕え従ふべし」とあるによつて明かである。さらに、フランスのいう従順は究極には神とキリストとに對する聖なる従順を意味したし、また命令は「稀なる場合の外は従順の徳の名において與えらるべきではない」と戒められてもいる。對等な人格的交わりによる結合はフランス團の特色であり、そこには自由な義務と責任とがある。この特色はフランス個人の人柄より出づる所であつたにしても、

そこには更に、やがて自由な人間性が目ざめ始める新しい時代の精神をみてとることができないであろうか。フランスは教團の父として兄弟達をいたわり導いたが、兩者の間の人格的な交わりがいかに人間的であり深いものであつたかは多くの記録がよく示している。同時代人ジャック・ドゥ・ヴィトリイ⁹がその著作に、ドミニク團についてその一章をさきながら、創設者ドミニクの名をあげていないのに對し、フランスス團についての章は殆ど全部をフランスの人格についての敘述で充たしていることは、彼が無意識に捉へた兩團の性格の差違を示し、又フランスス團がいかにフランスの人格に依る處大きかつたかを語るものである。

四

第三にあぐべきは現實社會との接觸である。兄弟達が修道院といふ一廓に閉ぢこもることなく現實社會の只中に生きたことは、この托鉢教團において始めてあらわれた顯著な特色である。ベネディクトの掟では、一度誓いを立て、院に入つた後は院長の許可なしにその垣の外に出ることは背信行爲であつた。¹⁰ 勞働やその他の勤行も定められた場所で行わるべきであり、現世からの分離こそ修道院生活の目

的だつたのである。しかし實際には先に述べた如く、俗化の傾向とともにこの掟も無視され、現世的活動のため、享樂のため、修道僧の出歩くもの數をまし、あたかもそれが普通のことのようにさへ思われる有様であつた。

フランスス團には「現世からの分離」がない。住家を持たない兄弟達は最初から社會の中に生きた。二人づゝ組んで巡禮を行い、社會の人々に福音を説き、人々に對する愛の奉仕を行い、年に一回又は二回一所に會合してはまた旅に出るのであつた。もつとも巡歴說教師はすでにこの教團の成立以前から各地に出現して居り、十字軍說教師もその一であつて、當時說教師自ら民衆の多く集る場所に出かけて神の教えを説くことが教化の効果的な手段だつたのである。

巡歴說教師であるとともに、愛の奉仕者として人々の間に實踐を行つたフランスス團の兄弟達が、社會に大きい感化を與え、隣人愛を實現し、平和をもたらしべく貢献した力は大きく、彼等によつて本來の宗教的信仰が現實社會の中に生々とよみがえつ來たと云えよう。

この托鉢教團の特色たる現實社會との接觸に伴つて、第四の特色としてあげらるべきものはその一般民衆性、平信徒性である。フランスス團に入るには信仰と神への愛と、

そして決意の他、何の資格も條件も要らず、地位、身分、財産を問わざるは勿論、人数の制限もなかつた。従來の修道院は十二・三世紀には多く貴族の占有物となり、富裕な特權身分となつていたから、そこに入る場合身分や財産が條件となつていたし、人数にはもとから制限があつたのである。

フランスのもとに集まつた兄弟たちは、多種多様な身分、經歷、財産の所有者であつた。フランス自身は富める商人の子であつて、貴族や僧侶の特權身分には屬さず、教育も殆ど受けていない一市民である。彼は一俗人として教會や僧侶の媒介を経ずに直接神の召命を信じて起ち、生涯教會の任命による司祭の列に加えられることを拒んでゐた。教會の成立のためには教皇の認可をうける必要を肯定し、また教會や僧侶を尊敬すべきことを繰返し兄弟達に説いているが、しかし彼は教會の教義や儀式、聖典に捉われず、信仰を實踐の問題と考え、教會の外で一般の人々と同列の神の下僕として働くことを望んだのであつた。此の世の何物にも捉われず、現實社會の中にキリストの教へを實踐せんとする平信徒的なこの信仰は、一般民衆に訴える所が大きかつたのである。

こゝで第三團について少しく述べねばならない。これは

市民として通常の社會生活を營み、家庭生活や職業生活をつづけながら、教へに忠實ならんとする男女の贖罪者達のために、當時フランス團の保護に任ぜられていた樞機官ウゴリノがフランスにすゝめて一二二一年に設立された俗人信徒の團體である。¹¹ 彼等はフランスの教へを守り、第一團の兄弟達の指導の下に宗教的生活に勵んだ。市民の宗教團體としてそれ自身の掟をもつ彼等の生活が、市の行政當局の要求と牴觸して兩者の間に軋轢を生ずることもあつたが、¹² 信徒の数は次第に増し、その禁欲的宗教的生活態度を以て世俗の欲望に挑戦しつゝ廣範圍にひろがつてかなりの社會的勢力となつた。かゝる大きな一般俗人信徒の團體がフランス團の指導の下につくられたことは、この教會の特色たる現實社會との接觸はもとより、その一般民衆性、平信徒性の具體的顯現として重要である。

最後に自然愛および人間感情の昂揚が、この僧團の特色としてあげられよう。これはある意味でルネサンスとのむすびつきという點からも、重要視されてよい特色ではあるまいか。フランスおよび兄弟達は此の世の森羅萬象凡てを神の業とし神の表象として受容れた。フランスにとつて凡ての自然物はひとしく父なる神の被造物として互に兄弟姉妹であり、ともに神の榮光を顯すものと感得され、

一木一草、小さな花、鳥獸に至るまで、彼は自らの兄弟姉妹の感覚をもつて慈しんだのである。¹³ フランスの自然愛は兄弟達の精神にも感化を與へ、彼等は自然を自分がその中に住む世界として意識し且つ愛した。けだしかゝる自然界は、現世から分離して修道院内にこもるべき修道僧には縁遠い世界であつただろうが、一定の住居を持たず、巡歴の旅をつづけるフランス團の兄弟達には己が世界として受け取られるのであつた。無所有に生きて何物にも執着しない者達には、周囲の世界の事象凡てが神の愛より出で神の榮光を示すものと實感され、感謝と讚美の心に溢れることが多かつた。神の愛を信じて喜びと感謝にみちた明るい福音的信仰が素朴な彼等の信仰だつたのである。こうした自然愛および感情の昂揚は中世的傾向を一步脱却したものであり、人間的感情の成長とみられる。ルネサンスをまつて鬱勃と歴史の表面に湧出してくる人間感情はフランスの信仰の内にもその芽生えを見得るのであり、これは發展せるイタリヤの都市に育つた彼が若かりし頃人間的情緒や現世的享樂に浸つて過したことを考え合わせることができるのである。彼は感情ゆたかな人間性を以て、宗教と自然、神と人間とを和解させた人であるといえよう。

五

修道院の共同財産に依存し、院内に生活する修道僧が、修道院という團體の一員として固定された自己を生くべく餘儀なくされたのに對し、個人としても團體としても依存すべき財産を持たず、社會の中にまじつて生きたフランス團の兄弟達は、自由な個人としての自己をあらわすことができた。社會の中での個人的な愛の奉仕が、フランスの教える勞働の内容であつたことは、ベネディクトの掟における勞働が、主に修道院領内での農業耕作を内容としたことに相對する。更に、修道院における結合のきずなが院長の家父長的支配權に對する修道僧の絕對服從の義務にあつたのに比べ、フランス團の結合はフランスを含めて相互の個人的人格的交わりに依存し、それは主體的なものであつた。これらは、都市の勃興發展とともに、都市民がもはや封建的共同體に埋没した一員としてでなく、個人として自由な自己を生きんとしはじめた時代の傾向に應ずるものであり、新しい社會生活のあり方がまたかゝる教團の主義や組織を許したわけである。農業を基礎とする自然經濟に據つた封建社會において成立した修道院の規則またその在り方と、封建社會の解體期に都市においては定められ

たフランスス團のそれとが、異つてくるのは自然の成り行きであろう。フランスス團の成立によつて、宗教は一般民衆の間に持ち返され、社會の實際生活の内によみがえつた。このことは第三團によつても廣く果されたのである。自然すらも豊かな感情を以て信仰の中に受容され、神およびキリストへの愛において人間や自然への愛が肯定され、人間的感情と信仰とが結合された。

以上こうした新しい特色をもつフランススの思想は、カトリック教會的信仰の限界に止まりながらも、無意識にこれを一步脱け出でんとしているのであつて、そこにはルネサンスの傾向の萌芽がみられるのである。トーデ(H. Thode)はフランススの運動がルネサンスのヒューマニズムおよび宗教改革を促進したことを主張し、且つその自然に對する個人的人間的にして信仰的な統一感情の普及がルネサンス藝術を生んだのであると論じている。もとよりこのフランスス團の運動が思想的にルネサンスの先驅である¹⁴と直ちに斷定することはあたらないと思われるし、またその信仰がプロテスタンティズムへの方向を含んでいるとしても、それを直接のつながりにおいてみとめることは困難であろう。フランススは教團が教會の組織に含まれることをきらつて獨立を志したが、しかし一方、あくまでカトリ

ック教會を忠實に肯定し、カトリック的信仰の限界内に止まつていたし、しかも此の教團は發展し擴大するにつれて教會の干渉をうけ、創始者の意圖に反して教會の支配下に組み入れられて行つたのである。

なおフランスス團のもつ時代的意義の問題について、同團と異端との關係が考慮される。フランスス團はその周邊において、異端的運動と接觸し、交流するものがありはしないか。このことは反ローマ教會的傾向の擡頭に集約化されるところの新しきものが、古きものにとつて代らんとする時代の一兆候として注目すべき點ではあるまいか。

フランスス團の生活態度及びその思想は、同時代の異端諸派のそれと表面的に多く共通點をもつ。されば一二〇九年フランススが自らの掟に基く教團設立の許可を教皇に乞うた際、教皇はしばしこれを躊躇した位である。しかし異端が教會や修道院の墮落を許さず、これに徹底的批判を加えて反抗し、教會の權威を全く否定し、社會的政治的意味をもつた運動として傳播して行つたのに對し、フランススは教會に入るをきらつて自分の小さな獨立の團體を守り續けたけれども、自己の主張を教會の主張と對決させることもなく、それを教會に及ぼさんと思へることもなく、自らの信仰を己が教團の中に守り、愛の奉仕を行う平和の使徒

たらんとしたのである。したがって両者ははつきり區別されるが、しかし同じ時代の同じ趨勢にのつて生れたことに相共通するところがある。異端の中最大なるワルド派の如きはその主義や生活態度においてフランスス團のそれと全く似通つて¹⁵いる。またフランススの死後、この教團の掟をゆるめて、教會の政策に妥協せんとした一派 (Frères Communitate) に對抗して、本來のきびしい使徒的生活を守ろうとした他の一派 (Spirituales) は、教皇ボニファチウス三世によつて異端と宣告されているのである。

都市における俗人信徒の團體として社會的勢力をましていた第三團は、その周縁において異端運動と相重なるところ¹⁶がなかつたであろうか。今はその資料を得ない。

以上フランスス托鉢教團の初期における兄弟團の特色および性格を分析し、それが當時の歴史的社會的環境といかに關係しているか、すなわちそれにいかに對應し、それからいかに規定されているかを考察してみた。

宗教運動の如き純粹に精神的な面の現象も、それが社會内の一現象である限り環境と獨立ではあり得ず、やはり時代の性格を帯びて居り、それと密接に關係していることが見出される。たゞしかゝる面の考察だけでこの教團運動そのものの理解を全うしたというのでは決してない。

註

- (1) 異端諸派の共通特徴は、古代においてキリスト教の正統信仰の強敵であつたグノーシス派やマニ教の流れをくむ二元論を思想的基礎とし、原始キリスト教の使徒的無所有の強調、結婚の罪惡視等禁欲倫理を主張し、カトリック教會の權威を否認し、その俗化を非難したことである。
- (2) 一二〇九年に許可をえた掟は口頭であつて、それは一二一年になりフランスによつて書き留められた。
- (3) G. Coulton: Five Centuries of Religion Vol. II. p. 214.
- (4) Ibid Vol. I. p. 266.
- (5) 彼等が俗人商人に伍して成功を収めたのは、自らの勞働によつて清貧に生くべき修道僧に對しては初めから通行税や十分の一税が免ぜられて居り、税を課せられる俗人商人より下値に賣捌いて利を占むことが出来た故である。
- (6) 書籍をもつことさへ禁じられた。またフランスは知識は信仰を亂すとの考えをもつていた。
- (7) 以前の修道院の中にも「所有」に反對し物乞いによつて生活した修道僧が散見できるが、それは唯個々に存する個人的行爲にすぎない。
- (8) ベルナルドは人間の魂とキリストとの關係を花嫁と花婿

との關係にたとえている。

- (9) Jacques de Vitry アウグスチン僧團に屬し、ひろい經驗をもち、知的道德的にすぐれた人である。一二三〇年、「西歐の歴史」(Historia Occidentalis)を著す。

- (10) 「住所の固定 (Stabilitas Loci)」はベネディクトのに授けける重要なものである。

- (11) この第三團については、フランスの感化によつて新たに成立したとする説や古くからあつたかゝる贖罪者の團體が教會側の意圖により、この時フランス團に屬せしめられたものであるとする説等があり明らかでない。これは教會の管轄下におかれた。

- (12) 第三團に屬する市民達が質素な生活をまもり、餘分な富を多量毎年貧者に施すことは市の經濟活動を妨げる恐れを生じたこと、および彼等が自らの掟のために市の命令で軍務に服することを拒絶していたこと等が、市の當局の反感を招いたのである。

- (13) 彼の作になる「太陽の歌」には、「兄弟なる太陽、姉妹なる月」など、凡ての自然物を兄弟姉妹とよびかけ、又、「死」すら「姉妹なる死」と彼はよんだという。

- (14) Ernie Gebhart はこの教團運動を「中世における宗教的ルネサンス」といひ、Ernest Renan は「プロテスタンティズムは實は三世紀早く十三世紀におこつていた」という。しかしカトリックの學者は之を否定する。

(15)

ワルド派はフランス教團の先驅と考えられることもあるが、兩者の關係を示す證據はない。唯かゝる類似の運動が以前に存在したことによつて、フランスの運動が民衆の中に浸透し易かつたということがいえる。

(16)

第三團の成立の歴史、内容、性格等については種々考察すべき點があるが、それは又別の問題としてこゝでは略する。